

和をもって

第8号

発行
成相山成相寺
京都府宮津市字成相寺339
TEL0772-27-0018
http://www.nariaiji.jp/

謹んで震災のお見舞いを申し上げます

この度の、東北・関東地方地震により、皆様に被害が及んではまいかと、心から心配致しております。

世話人様の中にも被害の大きかった場所にお住まいの方や今現在も避難を余儀なくされておられる方がおられます。世話人様の中で五月末までに震災によりお亡くなりになられた方はいらつしやらない様で、何より安堵致しております。

全国からの支援、そして世界中からも沢山の支援が寄せられています。一日も早く被災されました皆様にとって心休まる日が来ますことをお祈り致します。三ヶ月が経って復興に取り組む人々の姿や、一歩一歩前に歩もうとする人々の姿も報じられるようになりました。こちらが逆に勇気づけられている様な気がします。被災しなかった者も負けてはいられません、多くの時間がかかるかもしれないが皆様の笑顔が戻るまで私共に出ることを考え続けて参ります。

被災地で自衛隊の方々や救援のボランティアで頑張っている方々



の姿を想う時ある言葉が蘇りました。その言葉は「無我」であります。先々代哲眞老師がよく色紙に書していた言葉であります。あの方々、まさに無我の境地なのでしょう。

地震直後の被災地に派遣された若い看護婦さんの手記を読みまして、とても感動しました。先輩看護師さんに「泣くくらいならとつとと帰りなさい。私達は仕事をしに来たのだからね。」まだ歳若い彼女には相当シヨックな現実だった様です。行き場のない患者さんや、震災で親を亡くした小さな女の子や、普通の状態なら助けられた命。どうし

ような現実。初めの頃は感傷的であつた彼女の手記が日を追う毎に力強く「私に出来ることをやり抜くだけ。」と綴られておりました。

自分が悲しいからと、めそめそ泣いていては仕事は出来ない。と彼女が思い至つた時、彼女の中に「無我」が生れたのだろう。と思ひ涙が出てきました。思いやりよりも、もつと強い何か。それは「無我」から始まる行動なのだ。と改めて、強く感じました。若い彼女の手記から多くのことを教えられました。怪我をしても、具合が悪くても、とことん我慢してしまう現地の方々に向けた、彼女の最近のコメントは「被災地の方々はもう十分頑張つたので頑張らなくていいから元気でいてください。私達が頑張りますから。」でした。

今現在も、被災地で色々な仕事に携わつておられるすべの方々に心より敬意を表します。くれぐれも、お身体に気をつけて下さい。観音様の「観」と言う字は見ると言う意味です。観音様は、色々な事を広く見ていて下さっています。苦

しんでいる方の側で苦しみを共に感じて観て下さっています。一人ではありません。決して一人ではありません。転んで泣きじゃくる子どもの背中を撫でて励ます様に、私達の肩を心を優しく包んで下さっています。

その時が来たら、又、元氣を出して立ち上がりましょう。その時まで苦しんでも悲しんでも共に観音様が寄り添つて下さっている事を思い続けて下さい。

私共も、自分に出来る何かを考え続ける、そして忘れない。この事を強く心に留め置きます。如何なる時も貴方様と共に観音様がおわします事、そして安心な日々が一日も早く戻ります事を心より御祈願申し上げます。 合掌

南無大慈大悲観世音菩薩

山主 弘眞



千日まいり紫燈護摩

山内順礼第六回

成相寺参詣曼荼羅

今回は四月の中頃から五月末まで内陣で一般公開致しておりますが、「成相寺参詣曼荼羅」をご紹介します。

中世室町時代（約六百七十年前）に製作されたこの参詣曼荼羅は、当時の成相寺の僧侶達が遠くの街々でこの絵図を開き勧進や参拝を勧誘した折りに持ち歩いた物であります。

古代から近世に至るまで、観音様の聖地を巡り歩く人々にとって、聖地とは、どのような場所であったのか。そして、聖地とは何だったのか。それらの答えがすべて、この一幅の曼荼羅に隠し描かれています。見る者を聖域に誘う不思議な絵解き物語。それが、参詣曼荼羅であります。

絵の上方には、左右に配置された「日・月」。一つの絵の中に太陽と月が描かれている不思議。中央に観音霊場の中心である本堂を据えてそこへ伸びる幾筋もの参道。そして、下方には橋立の松並木が描かれ、海へとたどり着きます。人や物の往来の多い参道と寺院という、現世の賑わいに対峙して日月の現す天界。そして、海へと続いていく異界。これらは、すべて、仏陀の宗教観に繋がっていきます。しかしながら、この曼荼羅図の中には仏の姿はみあたりません。これが一番の不思議です。



(成相寺参詣曼荼羅)

観音霊場の勧進、つまり宣伝を行う僧侶が持って回った絵でありますが、観音様のお姿は描かれておりません。つまり、山そのものが観音様なのです。阿弥陀の来迎をたぐり寄せて極楽浄土へ向かう人々の如く、本堂へ伸びた参道を観音様を目指して登る人々。仏の世界を形作る五重塔や、数々の堂塔。山が仏の姿、仏の世界そのものとして、描かれているのです。

そして、「日月」とは、我々が仏教信仰を受け入れる以前の太古より受け継がれてきた自然崇拝を現わした物です。山に住まい、自然と共に暮らし、その中で、

仏の教えを体得し、自ら仏となることを願う人々が集まる場所。これが霊場です。これらを一枚の絵にまとめた物を参詣曼荼羅と呼んでいるのです。

直接的に観音様の姿を描くことなく、「日月」を配置する事によって自然崇拝に立ち寄り、そして何かに導かれるように集まる人々の姿。これらを眼にした古来の人々の心の中には一つの憧れにも似た願いが植え付けられてゆきます。「あそこに行きたい。」

「行けば極楽が見える。観音様に会える。」見る人全てに仏の世界を想起させる。そして、霊場に対する強い憧れを抱かせる。これが曼荼羅の持つ一番大きな不思議なのです。

現代で例えるなら、ショールームの中で見たこともない立体画像が映し出され、我々を未知の世界へ誘おうとする広告媒体。これが、参詣曼荼羅の正体であるのかもしれない。

寺宝として、承らく蔵に納められておりました。昭和三十代に京都国立博物館に保存委託をお願い致しまして以来、この成相寺の本堂での公開は初めてとなり、多くの方に御覧頂きました。

御縁のながさ

震災後、多くの世話人様から、ご無事のお便りを頂戴致しました。ここに、何通かご紹介させて頂きます。

「今度の大地震では生活のライフラインに不便を感じましたが、都市ガスも十八日目にやっと付きました。自宅のガスの復旧には北海道ガスの職員が担当して頂きました。このように日本国中はかりでなく諸外国の方々も大勢復旧のために応援に訪れて頂いております。大変有り難いことです。暫くの間、耐乏生活が続いておりますが、現在どうにか平常の生活に戻りつつありますので、どうぞご安心下さい。」（仙台市より）

「お陰様でこちらは被害が少なく済みましたが、時々余震があります。石巻の方が避難されていますが皆さんのことを思うと心が痛みます。お互い元気であれば、と助け合いの気持ちでがんばります。」

「お陰様で観音様のご加護で導かれるまま外出先から咄嗟の機転と申しましようか高台の町立病院へ避難致し命だけは助かりました。間もなく津波が一階まで浸水、私は四階へ上がり当夜は暗い病院の廊下で過ごし停電断水通信不能、家族との安否確認もままならずに、早朝私達の眼下には瓦礫の山と化した町が姿を現わしました。先代からの思い諸共家も消えてしまいました。自衛隊消防隊ボランティア多くのの方の救援によって瓦礫の山も変ってきております。避難所から八日目にそちらに迎えられすしております。」

（女川町より）

被災された方々には心よりお見舞いを申し上げますと共に、御無事の皆様方におかれましては、本当に良かったです。引き続きなにかとお大変であろうかと思いますが、私共に出来ます事があれば何なりとお申し付け下さいませ。

福島の方で、今なお避難生活を余儀なくされておられる方もまだ沢山おられます。

御連絡頂ける日が一日も早く来ますのを心よりお待ち申し上げております。